

# 島崎藤村の南米行

## ——「国民外交」の視点から——

酒 井 一 臣

### はじめに

もとよりこの南米行にはいろいろな方面からの依頼を受け、その使命をも果たさねばならず、無事帰国の上はそれらの報告をも齎さねばならなかつたが、それとてわたしは強ひてするやうな意識を持たずに、おのづから眼に触れ耳に触るものがあるだけでも満足して、多くの旅人と同じやうに、成るべく浅く浮びあがることを楽しみに国を離れたものである。わたしもこの年になつての旅であるから、家内引き連れ世界の巡禮にでも出掛けるやうな感が深かつた<sup>(1)</sup>。



南米に向かう  
船上の藤村

1936年7月16日、藤村島崎春樹は、神戸から「リオデジャネイロ号」に乗船して南米に旅立った。アルゼンチンで開催される第14回国際ペン・クラブ大会出席のためであった。64歳になっていた藤村は、すでに大作『夜明け前』を書き上げ、文壇の重鎮として日本ペン倶楽部会長に就任していた。大会出席だけがこの旅行の目的ではなかったことは、外務省から5万円も

の旅費援助を受けていたことから明らかで<sup>(2)</sup>、藤村は、アルゼンチン・ブラジルでの移民視察や講演活動を行った後、北米からフランスをめぐって翌年1月に帰国した。

ところで、帰国直後の37年2月、藤村は外務省亜米利加局内に設けられていた移民問題研究会で南米での見聞について講演をおこなった。これは『南米移民見聞録』として出版されたが、『藤村全集』にも収録されておらず、あまり知られていない<sup>(3)</sup>。一方、この南米旅行の紀行文は、1940年に『巡禮』と題して公刊された。『巡禮』の記述は、日本の一知識人の対外認識を知ることができる部分もあるが、総じて散文的で、国際ペン・クラブ大会参加や南米視察の政治的背景を考えると、いささか違和感があることは否めない。冒頭に引用した「巡禮」としての旅行とは、大作家一流の修辞だったのか、それとも外交に利用されることへの反発だったのか。

本稿は、藤村の南米旅行を、当時の日本の対外政策の文脈に置いて再考し、いわゆる文化人の国際交流の外交的意義を考察するものである。藤村の南米旅行に関しては、晩年に「国家主義的」になるなかでの国策協力としてとらえるのが一般的である。これに対して、より複雑な藤村の思想や周辺事情を指摘した目野由希と稲賀繁美の研究がある<sup>(4)</sup>。目野は、藤村の南米派遣が「実務より名義を活用するような国策的文化交流」の一環だったとし、藤村は必ずしも国策の路線に従わなかったが、その南米行が最晩年の「アジア主義的主張」を生む契機となり、「彼の不思議な…ナショナリズムとインターナショナリズムのもつれと活力」につながったと論じている。一方、稲賀は、国際ペン・クラブへの参加が、クラブの精神である国際協調主義への同調と「国粹的な傾向を強める国家政策の補助」というジレンマを抱えるものであったが、「日本移民の寄る辺なき境涯に身近に接し、文学や藝術を拠り所に励ましと労わりの志を伝えること」が「公式任務に勝るだけの重みを宿した、文学者としての真摯なる責務へと成長していった」と指摘している。ここで注意すべきは、両者とも晩年の藤村を簡単に国家主義的と片付けることを留保している点である。特に目野は、日本ペン倶楽部をめぐる諸史料を丹念に発掘し、藤村の解釈にも新たな解釈を提示した。すなわち、近年の外交史研究を踏まえれば、1930年代半ばは日本の外交当局は国際協調主義に戻ることを模索していた時期であり、藤村の南米行はその文脈で理解しうるものだというのである<sup>(5)</sup>。目野や稲賀の主張にはおおむね首肯するが、惜しむらくは、両者とも、藤村の立場が当時の対外政策の上でいかなるものであったのかについては明確な結論を提示していない。

ところで、藤村評価が錯綜している一因は、「国家主義」・「国際協調主義」などの当該期の政治外交上の立場を表す概念解釈の混乱にあるように思われる。一例を示せば、国家主義については、一般的な意味でのナショナリズムと1930年代以降の日本の超国家主義的志向を区別する必要がある。また、国際協調主義と帝国主義は、当時の外交戦略では相反するものではないし、国際協調主義とインターナショナリズム(国際主義)は同義ではない。平和主義・反植民地主義を基調とした現在の国際協調主義とは異質なものといってよい<sup>(6)</sup>。この点からも、文学解釈もしくは文化研究としての従来の藤村研究成果を踏まえつつも、依然として外交史の観点から藤村の南米行を再検討する余地は残っているものと考ええる。では、藤村の議論が国家主義で

ないとするならば、一体何であったのか。国際協調主義の促進を秘めた南米行だったといえるのか。本論が明らかにしたい点はここにある。

第1章では、1930年代半ばの日本の外交政策や移民問題に触れつつ、藤村の南米旅行の足跡をたどる。つづく第2章では、『南米移民見聞録』をもとに、藤村の言動の外交的位置づけを検討する。第3章では、藤村の南洋行が「国民外交」という概念で説明しうることを論じ、最後に文化人の国策協力を評価する際の問題点を指摘する。

## 第1章 藤村南米派遣の外交的意味

周知のように、近代の日本は、人口過剰と資源不足問題の解消を目的に、移民を大量に送出した<sup>(7)</sup>。明治期の日本政府は移民政策に消極的だったが、第一次世界大戦での南洋群島獲得を機に、政府主導の移民送出に転じた<sup>(8)</sup>。よって、それ以後の移民送出は基本的に「国策」であったといえる。移民先は、日本の植民地・勢力圏をのぞけば、圧倒的に南北アメリカ大陸に集中していた。当初の移民は、ハワイと、そこからの再移民も含めて北アメリカが多かったが、日露戦後からアメリカ合衆国での排日の動きが強まり、1924年の排日移民法成立によって事実上対米移民の道は閉ざされた。これによりブラジルを中心とする南米移民は重要性を増すことになった。1921年から1925年に1万人強であったブラジル移民は、次の5年間には6万人弱、その次の5年間には7万人を越えたのである。

ところで、主たる移民送出先であったアメリカ大陸諸国は、日本の植民地や勢力圏ではなく、むしろ非白人である日本人が「遅れた」人種ではないことを強調しなければならない地域であった。アメリカでの排日運動の一因は、日本人移民が同化に適さないことであった。人種差別的な排日論に対する感情的な反発はあったが、日本の外交当局の基本姿勢は、日本が「文明国」であることを示し、日本人移民受入れ国の批判をかわすことに終始した。これには、勢力を拡大する帝国日本への警戒感を緩和することが優先されたという事情もあったが、いずれにしろ移民をめぐる対外政策の基調は、欧米諸国との対立回避が主眼であった。すなわち、帝国日本の拡大を進めるべく植民地帝国間での利害調整を行うのがアジア太平洋戦時期をのぞく近代日本の国際協調主義の原則であり、満州事変以後の1930年代であっても、中国大陆の権益に関しない限りは、あえて列強と対立しないことは、当然ともいえる外交戦略であった<sup>(9)</sup>。

しかし、期待をかけていた南米ブラジルでも日本人移民に暗雲がたちこめることになった<sup>(10)</sup>。日本政府は、アメリカに代わる移民先としてブラジルを重視し、1924年には200円の船賃補助を開始し、1932年からは50円の支度金の支給も行った。これを受けてブラジルへの移民は激増したが、日本人に同化性がないことなどを理由に排日の気運が高まっていった。1934年にはいわゆる二分制限法が成立し、日本人移民数はブラジルに定着する日本人移民の二分(2%)に制限されることになったのである。

日本政府は、ブラジルにおける日本人観は誤解にもとづくもので、日本・ブラジル間の交流

不足がその一因であるとした。1935年1月には澤田節蔵が新任大使として赴任し、「対伯工作」（「伯」はブラジル＝伯刺西爾の略）にあたることになった<sup>(11)</sup>。その「工作」の一つが「ブラジルの識者、実業家、文化人学者等を日本に招致して日本の真相を知らせ、同時に日本からもその種の人物をブラジルに派遣して日本の紹介に努めさせる」<sup>(12)</sup>というもので、藤村の南米派遣もその一環であったと澤田は回顧している。

ここで、藤村の南米での足跡をたどってみたい<sup>(13)</sup>。

850人あまりの移民とともに南米に向かった藤村は、1936年8月29日ブラジルのサントス港でいったん上陸し、国際ペン・クラブ大会に出席するため、すぐにプエノス・アイレスに向かった。9月5日から大会に臨んだが、その合間には、日本人小学校などを視察した。9月17日、日本公使館でのレセプションでは、雪舟の絵を題材に「日本的なるもの」を講演した。9月23日にはブラジルに到着し、サンパウロ周辺で、日本人農場見学や講演を行った。サンパウロ郊外では、藤村の筆になる和歌4首を刻む石碑の設置予定地も見学した。9月29日にはリオ・デ・ジャネイロに赴き、澤田大使と会見、ここでも講演を行い、ブラジル外相とも会談した。10月1日、イースタン・プリンス号に乗船、ニューヨークに向かった。この後も、アメリカからフランスをめぐる藤村の旅は続くが、公的な色合いは薄れて個人旅行の観が強まった。

約1か月間にわたる南米滞在中の藤村の行動は、文化交流のために訪問した日本の有名作家としてはとりたてて特別のものではない。現在でも、日本の著名人が公的立場で外国訪問をすれば、同様な行動になるであろう。他方、先行研究では、藤村の言動の背景に着目して分析が進められてきた。たとえば、稲賀繁美は、藤村は雪舟や芭蕉をとりあげることで、「前近代の日本に近代性の徴候を認めよう」としたと論じる。藤村が意識的であったかは別にして、「文化英雄の国際的名声が、民族主義の鼓吹や、偏狭な国粋主義の増長にも容易に手を貸し、世論操作の道具に利用されがちなこと」を指摘し、藤村の言論に危険な要素が含まれていたとする<sup>(14)</sup>。また、目野由希は、1941年に皇紀2600年の記念事業として刊行された『ブラジルにおける日本人発展史』の巻頭写真に藤村の書いた歌碑が掲載されたが、第1回ブラジル移民の名が刻まれた面のみが紹介されていることを指摘し、これは、国策的国際文化交流において、藤村が「本質的には対等な協力者ではありえない」ことの示唆だとする<sup>(15)</sup>。こうした議論の可否は後述するが、言説・表象分析の段階にまで及ばない表層をみれば、藤村の言動は、何ら奇異なものではなく、穏やかな文化交流の一コマを演出したものであったといえよう。

ここで注意すべきは、そもそも日本の外交当局は、藤村の言動に、国粋主義の強調や帝国日本の礼賛を期待しなかったはずだという点である。植民地や勢力圏をのぞく海外移民の場合、受け入れ国との友好関係促進は当然のことであった。上述のように、日本の権益に反しない国家と対立する必要はなく、国際協調のため、大作家が穏当な文化活動を行ってくればよかったのである。また、「棄民」扱いされがちな日本人移民を励まし「文明国」の国民としての自負をもたせるべきだということも、移民問題に関わって明治期から主張されていたことであり、それは国粋主義高揚のためではなく、日本の体面を保ちつつ受け入れ国民と日本人移民の無用



Año XIII N.º 647

## EL "ARGENTIN DIIJO"

DIRECCION  
USPALLATA 361  
U. T. 23.7651. B. Ora.

Buenos Aires, Sábado 5 de Septiembre 1936

SECCION CASTELLANA

Circula los días 1, 3, 5 y 7 de cada mes

## BIENVENIDOS XIV Congreso Internacional de los P. E. N. Clubs

A bordo del motorcruz "Rin Janetsu Maru" de la Osaka Shosen Kaisha, el puerto y del continente llegaron los delegados del Nippon P. E. N. Club al XIV Congreso Internacional de los escritores. Señores Toson Shimazaki e Ikuma Arishima, cuya venida anunciamos oportunamente en estas columnas. Como hemos dicho en nuestras informaciones anteriores, el señor Shimazaki viene acompañado de su señora esposa, y los tres están invitados por el P. E. N. Club de Buenos Aires durante el tiempo que permanezcan en el país, habiendo tomado la residencia en el City Hotel de esta capital.

Los viajeros fueron saludados en el puerto por el Encargado de Negocios de Japón, Dr. Hirodatsu Terajima y señora, autoridades del P. E. N. Club de Buenos Aires, del Instituto Cultural Argentino-Japonés, de la Sociedad Japonesa en la Argentina, periodistas y numerosos residentes japoneses de esta ciudad.

La organización del Congreso Internacional de los escritores ha congregado en esta ciudad cultural de sudamérica un centenar de escritores, poetas, críticos y artistas del mundo entero. A viencia en el momento de mayor actividad intelectual y espiritual, cuando funcionan aquí, diariamente conferencias y exposiciones de toda índole, y hacen palpitar al espíritu culto de la arraigada civilización latina de esta magna ciudad de Buenos Aires, convertida en un Centro internacional del mundo, en tanto que brinda hospitalidad a los visitantes.

Si el progreso material de la Argentina, del cual queda maravillado todo el que por primera vez visita este país, si nadie puede dudar del brillante porvenir que le espera esta nación, el aspecto intelectual que presenta hoy esta ciudad, resulta de clave para el observador lo que puede ser la Argentina cultural en un futuro cercano.

En medio de esta actividad que nos tiene presente en la Argentina, nos es grato contemplar la presencia de dos escritores eminentes del Japón, quienes, en contacto diario con los colegas argentinos, podrán sembrar semillas culturales de incalculable valor para las relaciones espirituales de ambos pueblos.

Con este espíritu fraternal que nos anima, igual a los argentinos y japoneses, saludamos a la señora de Shimazaki y los señores Toson Shimazaki e Ikuma Arishima, deseándoles grata permanencia en la Argentina.

Este artículo es inaugurado en cumplimiento del convenio internacional de los escritores que se suscribió en el Congreso de Berlín.

## PROGRAMA DEL CONGRESO

El Congreso tiene su sede en el Hotel City de Buenos Aires.

El señor Shimazaki, presidente del Nippon P. E. N. Club, y el señor Arishima, secretario del mismo, serán los encargados de la recepción.



Señor Toson Shimazaki, Presidente del Nippon P. E. N. Club, poeta y novelista, escritor que está considerado como el más representativo de la literatura contemporánea del Japón.

El programa del Congreso, en la ciudad de Buenos Aires, se divide en tres partes: la primera, la segunda y la tercera. La primera parte, la segunda y la tercera, se celebrarán en la ciudad de Buenos Aires, en el Hotel City, los días 1, 3, 5 y 7 de cada mes. La segunda parte, la segunda y la tercera, se celebrarán en la ciudad de Buenos Aires, en el Hotel City, los días 1, 3, 5 y 7 de cada mes. La tercera parte, la segunda y la tercera, se celebrarán en la ciudad de Buenos Aires, en el Hotel City, los días 1, 3, 5 y 7 de cada mes.

El señor Shimazaki, presidente del Nippon P. E. N. Club, y el señor Arishima, secretario del mismo, serán los encargados de la recepción.

El señor Shimazaki, presidente del Nippon P. E. N. Club, y el señor Arishima, secretario del mismo, serán los encargados de la recepción.



Señora Shidzu Shimazaki, esposa del eminente escritor.

El señor Shimazaki, presidente del Nippon P. E. N. Club, y el señor Arishima, secretario del mismo, serán los encargados de la recepción.

SINTONICE EL PROGRAMA DE LA

Osaka Shosen Kaisha

todos los miércoles a las 19 horas

POR

RADIO  
EXCELSIORKatsuda y Cia.  
ImportadoresMEXICO 1474  
U. T. 38 - MAYO 2313  
BUENOS AIRESSadao Hattori  
Importador

Especialidad en artículos de Capilaria

LINIERS 649  
U. T. 46, LORIA 3218  
BUENOS AIRES

LAMPARAS "YAMADA" DE CALIDAD



Luz Clara - Terminación Precisa - Selección Especial

USE LAMPARA "YAMADA"

En venta en las mejores casas del ramo

H. KATO

Única Fabrica Japonesa de Seda y Gran Instalación de Tintorería

HERRERA 2097 y 2111

U. T. 21-1841

S. TSUJI

IMPORTADOR

BALCARCE 682

U. T. 33 (Avenida) 5744 - BUENOS AIRES

J. HAYASHI

REPRESENTANTE DE "SOL DE CANADA"

(Compañía de Seguros sobre la vida)

Oficina: Particular: CORRIENTES 222 C. PELLEGRINI 1153

U. TEL. 31 - 3461 U. TEL. 41 - 1906

「藤村を紹介する記事」『亜尔然丁時報』1936年9月5日

な対立を回避するために必要だった。雪舟解釈に含まれる問題はあったかもしれないが、重要だったのは日本文化の表面的な紹介であつたろうし、石碑に藤村が何を刻むかなどでなく、なすべきは日本人移民の存在を示すものを設置することであつただろう。

実際、国際協調と文化的雰囲気の中かで友好親善と移民激励が行われたことを、アルゼンチンでの藤村の扱われ方からみてみよう。アルゼンチンの日系新聞『亜尔然丁時報』は、国際ペン・クラブ大会と藤村の言動を大きく報道した。藤村の来亜は、「思想表現の自由、国民民族間の相互的尊敬理解の確保を基調とするペンクラブ大会」の精神に則り、「偏狭なる民族主義より解放されたる文化日本人の真の姿を示す「側面外交」になるとの期待が表明された<sup>(16)</sup>。これに応えるかのように、藤村の次のような談話が掲載された。

私は今尔ペンクラブ大会に非常な期待を抱き喜こんで私の使命を果すためにやつて来た。…「東は東、西は西」とよく謂われてゐるが、…ペンクラブの精神との間に介在する左様な暗影は凡て時代の力によって取除かれるものと私は信じてゐる。斯ういふ信念を持つてゐる私は今尔ペンクラブの結構な招待をお断りする事は出来得なかつたのである<sup>(17)</sup>。

そのほかにも、日亜文化協会主催の歓迎会、講演「日本に於ける近代文学発展の経路」（9月17日、於ブエノス・アイレス文化大学）、小学校訪問などの記事が掲載された。藤村の長男楠雄の「亜尔然丁へ行く父を見送って」とのエッセイも『週刊朝日』から転載され、子供の目から見た藤村像も紹介された<sup>(18)</sup>。19月13日の日本人小学校訪問で「桃太郎」を語ったことは、ほえましいエピソードとして記事になったが、藤村自身、このことは印象深かつたようで、『南米移民見聞録』・「巡禮」など随所で回想している<sup>(19)</sup>。

いずれにしろ、藤村に関する報道は、日本からの著名人来訪歓迎一色で、報じられる限りの藤村の言動も無難に徹しており、予定調和的なものに終始している。母国の大作家をめぐる華やかな行事をつつがなく行うこと。それがアルゼンチンの藤村に求められたことであつた。

## 第2章 『南米移民見聞録』

前章でみたように、南米での藤村は、歓迎に応じて、少なくとも表面的には無難な行動、すなわち著名人の国際交流の典型を演じた。また、それが資金提供をしていた日本の外交当局の意向でもあつたことが容易に想像できることも指摘した。しかし、そうであるならば、「巡禮」で南洋行の「使命」を「強ひてするやうな意識を持たず」と書いていることとの温度差が気にかかる。キプリングの「東は東、西は西」とのことばを批判的に引いて<sup>(20)</sup>、ペン・クラブへの意気込みを語ったのは虚飾であつたのか。もちろん、「巡禮」は文学作品であり、その表現は実際の藤村の「側面外交」活動とはある程度引き離して考えねばなるまい。そこであらためて注目されるのが、講演録の『南米移民見聞録』である。既述のように、この記録は、帰

国直後に外務省内の移民研究会で行われたもので、その内容が正確なものであるのか、中略となっている部分など刊行に際して藤村もしくは当局の手がどの程度入っているのか確かめることはできない。その点を割り引いても、「巡禮」にくらべれば一般の眼に触れることが限定され、外務省内での講演であったことを考慮すれば<sup>(21)</sup>、藤村が公的「使命」をどうとらえていたかを知るための史料価値はあろう。

『見聞録』は、60頁のパンフレットである。「はしがき」には、「島崎藤村氏が渡重されるに際し、帰途ブラジルに立寄り、在留邦人社会の実情視察、殊に同胞の情操の涵養、思想の啓蒙等に就いての研究を委嘱した」とはっきり書かれている。また、「外務省は必ずしも氏の見方をその儘是認するのではない」ともことわっている<sup>(22)</sup>。以下、冗長になるが、まずは『見聞録』の記述の概要を箇条書きにして記したい。

- ・乗船した「りおでじゃねいろ丸」には、850名あまりの移民がいたが、「南米に行って濡れ手で粟を掴むやうな工合に楽しい生活が出来る」わけではない。「向うへ行つても相当骨が折れるが、郷国に居る時と同じ気持ちで働けばそれだけの甲斐があるといふ風に」移民を勧誘すべきだ。  
(移民勧誘と移民勧誘書)括弧内は見出し、以下同。
- ・シンガポールで小学校を訪ねて「外国に居て自分らの子供をいかに育てたらいいか」が問題であることに気づいた。  
(邦人父兄の悩み・第二世の教育)
- ・シンガポールで南米移民は「棄民」だとの悲観論もあった。  
(新嘉坡邦人の南米移民観)
- ・移民は、「近頃では余程改善されて」「他の国へ行つてもさう恥ずかしくないやうな服装をして」いる。アルゼンチンなどへの移民は、支配地に植民するのとは異なる。  
(二十年前の移民と今日の移民)
- ・南アフリカで「オンリイ・ホホワイトとしてある喫茶店」にも日本人は入れる。日本人は「立派になつたやうな気がする」。「或る英国の教会に属する女学校などに家内などと一緒に参観に行つたこともございましたが、さういふところに、大へんキリスト教的な人の道といふもの、ヒュマニテイといふものが説かれて居ると同時に、また一面では、アフリカン或は黒人、支那人などに対して、さういふ者を賤しむ気持ちといふものは非常に深刻でございます」。  
(ケープ・タウンでの感慨)
- ・「一人宛に二百円ほどの補助金を持つて行つても、それで十年経つて自費で郷国へ帰ることの出来る者は先づ成功者の側ださうで」ある。  
(車窓に見る移民の姿)
- ・「鬼ヶ島にもだんだん鬼は居なくなつて、人の住めるやうな土地に、土地を耕し花を植えて、恐らく今日の桃太郎であつたらば、さういふ遠い島へ渡つても、昔は鬼の住んだやうな荒れた場所をも、人の住み得る土地と変へるであらう」。  
(幼稚園で桃太郎の話)
- ・「ヨーロッパの方でルネッサンスと謂はれる頃に吾々の国にもかういふ雪舟の如き大きな天才があつた」と「知らせるだけでも意味があると思つて」公使館のレセプションで話したら、アルゼンチンの人だけでなく在留日本人にも「かなり印象を与へた」。



(喜ばれた「山水長巻」)

- ・「その国ではその国の文化もあり、その国の教育もあるわけですから、それで日本人のみに特に変つた教育をされては面白くないと、ブラジルの当局の人が申すのは当然かもしれません」。一方、日本人二世が日本語を学ぶことは、外国文化の刺激となって「ブラジルの言葉を豊かにすること」を述べるとブラジルの記者も同意した。(ブラジル記者との問答)
- ・ブラジルへの移民は日本人とドイツ人が多く、ブラジル政府は「植民地となることを恐れ」ているため、「排日というやうな事も起るわけでございます」。(日本人とドイツ人)
- ・ラジオ体操のようなことは目立つので、「ああいふ風なことだけでも少し注意して見たらどうだろうか」。排日の一因になっているので、「あまり働きすぎるのもどうかと私は思いました」。(勤勉すぎてー)
- ・粗末な家に住むことは、「どうしてもそこに本当に根が生へて住まはうといふ気持ちがしない」。(住居を構はぬ日本人)
- ・「近頃のやうに日本主義といふやうなことが唱へられるやうになりますと、あちらの方に居りまして、今までは、お前はどこの国の者だと子供が訊かれると、俺はブラジルの者だといふ風に答へたさうでございますが、最近では、俺は日本人だと言ふやうな風になつて来たさうでございます」。「兎に角ただ移民は送り出せばいいといふやうなものではなく、本当に末の末まで世話をするといい気持ちが欲しいと思つて帰つて参りました」。

(母国の出来事に敏感な同胞)

先に、「巡禮」と比較して『見聞録』の史料的价值を強調したが、上記の内容は「巡禮」と大差ない。おそらく講演の原稿が「巡禮」に活かされたのであろう。最後の数頁のみ、日本人移民問題に対する全体的感想が述べられているが、「勤勉な日本人」、移民の将来を考えなければならないなど、内容はいたって平凡である。つまり、外務省で行った講演も、広く世間に発表する作品と変わらない次元でしかなかったということである。他方で、この点は、藤村の南米での言動が当たり障りのない文化交流以上のものではなかったことの傍証にもなる。

雪舟をルネサンス文化と同格に置いている点は、やはり隠しきれない国家主義・国粋主義のあらわれなのか。稲田繁美が指摘するように、日本の過去の文化に中国と同等もしくは凌駕する面を見出そうとするのは、「日清戦争戦勝にいたるまで、日本人の心性のなかに深く刻まれてきた劣勢複合の島国意識の、いわば裏返しでもあった」<sup>(23)</sup>。西洋と同格の面を見出そうとするのも、日本は西洋諸国に劣らぬ文明国であることを示したいがためであったといつてよい。ただし、『夜明け前』で扱われる国学思想が、武家政権を否定し、中・近世を暗黒時代ととらえたのに対し、雪舟評価の文脈では中世を再評価している点は注意を要する。

中世は暗黒時代ではなく、爛熟頹廃した平安貴族文化を刷新する武士による活力ある時代だと最初に強調したのは、歴史学者の原勝郎である。原は、西洋史研究者であったが、『日本中世史』(1906年)や『東山時代に於ける一縉紳の生活』(1917年)などで、鎌倉新仏教を宗教改革に、



東山文化をルネサンス文化に擬して、新たな時代像を提起した<sup>(24)</sup>。原勝郎が、日本中世史上の出来事を西洋史上の事件と並列させたのは、日本も西洋と同じ経路をたどってきたのだから、西洋諸国と同等の「文明国」になれることを強調するためであったと考えられる。西洋文明を基準にして、それへの近似が進歩であり、正しい経路だとする、典型的な「文明国標準」の発想だった。後発国だった日本の場合、こうした議論に自国の近代化や勢力拡張を願う強烈なナショナリズムが伴う。しかし、こうした「文明国標準」の考え方は、神である天皇が治める日本は西洋諸国に優越し、天皇の御稜威が行きわたって、日本が世界を支配するのだとする皇道論や、主権国家にもとづく世界秩序を否定し、国家を「超える」新秩序をめざす超国家主義とは全く異なるものである。また、近代的枠組みを重視するもので、それを超克しようという発想とも対立するものである。

藤村は、1941年のエッセイで、「父等には中世の否定といふことがあつた」として、『日本中世史』の序を引いて、原のように中世を評価するという見方に立てば、「父等が、国学を活かし得る路」があったろうとして、次のように述べている。

あたかもわたくしたちの器官が生活に必要な程度に於いて発達すると言はれるやうに、国民生活の上に於いても必要は一切のもの、母であつて、日本の開国に伴う急激な国際関係の変化は先づ西洋技術の摂取を急務としたであらう。どうして西洋が物質的で、東洋が精神的といふ風に、さう一概に片付けてしまへるものでもなからう<sup>(25)</sup>。

晩年の藤村は国学に傾倒したが、東洋もしくは日本を西洋と対峙させ優劣を論ずるという姿勢は、上記の口吻からうかがうことはできない。急速に軍国主義・国家主義が広がっていかでの文化のありかたの問題は別にして、すくなくとも、プエノス・アイレスで雪舟を同時代の中国や西洋にも卓越した存在として持ち上げたことだけをもって、藤村を国家主義と断ずることに無理があるし、いわんや「国策」を意識して国粋主義を宣伝したとはいえない。

『見聞録』中の南アフリカの部分では、人道主義と人種差別の矛盾を少し指摘しているが、この時期にはこうした欧米諸国の矛盾と抑圧を指摘して厳しく批判するといったお決まりの言辞はみられず、日本人は対象外になるほど「立派に」なったとするだけである。1920年代あたりまでは、日本が問題にしたのは「文明国」の日本人が差別されることであり、植民地支配に伴う差別そのものは批判しないのが一般的だった。この点でも、藤村の論理は、それまでの「文明国標準」的なものに近い。

むしろ目立つのは、藤村が日本の移民政策に批判的な点である。南米での生活の見通しが立たないまま移民を送出するのは「棄民」にほかならず、厳しい現実を移民希望者に伝えるべきだいうのだ。200円の補助金を与えても、渡航後の移民が成功する例は少ない点も指摘している。『見聞録』からうかがわれるのは、国粋主義・超国家主義に傾く「国策」に忠実な右傾化した藤村ではないばかりか、国際協調を演出して移民送出を円滑にしようとする外務省の「国

策」にも距離をおく藤村なのである。

### 第3章 藤村の「国民外交」

藤村は、日本ペン倶楽部会長として、副会長の有島生馬とともに、南米に赴いた。外務省依頼のブラジル移民の視察のついでに国際ペン・クラブ大会に出席したのではなく、大会出席じたいが、当時の外交政策の一環であった。

日本ペン倶楽部は、1935年に、外務省文化事業部第3課長で詩人でもあった柳澤健が、師事していた藤村らに働きかけて創立された<sup>(26)</sup>。芝崎厚士によれば、国際社会が閉鎖的になっていったとされる1930年代は、むしろ国際文化交流が盛んになった時期で、日本では1934年に国際文化振興会が設立されるなど、孤立化を避けるための積極的な国際交流が推進された。日本ペン倶楽部もこうした国策に沿うものであった。芝崎は、国際文化交流の根底にある国際主義をナショナリズムと対置させ、日本の国際主義は近代化もしくはアメリカニズムが未消化であったから挫折したという見方を批判し、国際主義は国際協調的で「よい」ものだという見方を所与のものとする発想では、1930年代の国際主義は理解できないとする<sup>(27)</sup>。

こうした問題を解決するために芝崎が着目するのが「国民外交」という理念である。「国民外交」とは、現在の「民間外交」とは全く異なるもので、国益のために国民総動員で外交を支援することである。現在でいう「民間外交」の場合でも、民間人が日本の国益に資するために個人として活動すべきと考えるのが大前提であった。ただし、国民が外交に参加するといっても、国際知識が乏しかった当時の国民の誰もが外交に参加せよという意味ではなく、実業家や知識人が先導し、多数の国民はそれに従って理性的になって国益の障害にならないようにすべきだという趣旨だった<sup>(28)</sup>。

この文脈で考えれば、藤村の南米行はまさに「国民外交」であった。藤村は、1913年から3年間のフランス滞在経験があり、国際文化交流にうってつけの著名人だった。同行した有島生馬もイタリアとフランスに留学経験があった。「国民外交」の使節である以上、藤村個人の希望はともかく、排日論を抑えるために国際協調的な印象を残し、厳しい環境にある移民を励ますことが、当時の国益に適う行動であった。前章でみたように、藤村は「国民外交」らしい言動に終始した。

あの出発の際わたしたちに託されたことは、来る千九百四十年には日本建国二千六百年に当り、東京においてはオリンピック大会を初めその他各種の学術会議、また展覧会等も開かるゝことであるから、同年国際ペン大会の会議地をも東京に定めたいとの各方面からの希望であつた。一方には国際連盟からも退きながら、一方には文化的に諸外国と手を握らうとすることそれ自身すでに困難があつて、折角託されて来たことながら国際ペン大会を東京に開きたいとの件もあらうかと案じられた<sup>(29)</sup>。

紀元2600年の記念事業の一環として国際ペン・クラブ大会の招致実現も藤村の「国民外交」として求められた働きだった。藤村の、国際連盟を脱退したにもかかわらず文化的に国際交流しようというのは困難だと懸念は常識的な判断だが、外務省は、脱退したからこそ、これ以上の孤立を避けるために一層の国際交流促進を望んでいたのである。

あらためて「国民外交」という概念で藤村の南米での言動を考えれば、それが国家主義的だったのか否かとの視点より整理がしやすい。日本の文化の独自性や特徴を紹介するのは、日本から来た文化人に期待される役割だった。また、小学校で童話を語り、日本語教育の重要性を示すのは、子女の教育に関心の高い日本人移民が、文筆を生業とする人物に期待するところであった。中国に侵略を開始し国際連盟を脱退したことには触れず、平和的な日本を宣伝することも、排日論を抑えるためには必要であった。『見聞録』・「巡禮」には、ブラジルの移民制限法のことなど、外交の機微に触れることは全く出てこないが、これも藤村が政治音痴だったからではなく、文化的側面のみを強調すればよいことを理解していたからであろう。たしかに、気概を持って大胆に日本の非を認める発言をすることもできたであろう。怒りを込めて差別的な移民制限に不当を訴えることもできたであろう。しかし、「国民外交」使節の立場では、発言内容は正当だとしても、やはり非常識な言動といえるし、もし藤村がそうした言動をするような人物であれば、そもそも南米行は実現しなかったにちがいない。

藤村の言動を、表面的には無難なもので、それこそ「国民外交」の特徴であったといってしまうと、それは単なる当時の現状肯定論にすぎず、思想的な深淵にはいたらないのかもしれない。しかし、以下は推測となるが、『見聞録』や「巡禮」でみせる藤村のどこか冷めた雰囲気の一因は、まさにその点にあるのではないか。目野由希が指摘するように、「国策的国際文化交流」の場合、「文学者の発言は政策決定因子としてはほとんど機能しない」、「実務より名義を活用する」といった特徴がある<sup>(30)</sup>。いいかえれば、「国民外交」(現在ならば国際交流)の名のもと、著名な文化人が便利使いされるということである。藤村もその点に気づいていたのではないと思われる。それが「巡禮」での「使命」を「強いてする」気になれないとの発言や、『見聞録』の移民促進に水を差すような批判となって現れ、移民観なども通り一遍のものになった原因と考えられるのである。

## おわりに

最後に、藤村のような作家や芸術家の政治的言動に対する評価が抱える問題点について、若干の指摘をしたい。

いわゆる文化人を評価するときに前提とされやすいのが、「芸術至上主義」とでもいうべき発想である。それはおおよそのところ、「芸術(学問)は、政治権力とは無縁のもので、芸術家は政治から超然としているべきだ。よって、国策に関係することや政策的志向をもつことは、芸術の価値を貶める」というような立場である。芸術作品の評価に関して、こうした見方が有

効であることは否定しない。しかし、国策や政府関係の役職に関わった文化人の言動を分析する際には問題がある。「芸術至上主義」でいけば、国家権力に関係する(近づく)ことは最初から「悪」だと前提がある。よって、国策に関わった文化人の言動への負の評価は当然の結論になってしまう。特に、日本の戦時期の場合、後世のわれわれは、時の政治権力が政策を誤って悪行を重ねたことを知っているだけに、文化人の国策協力を国家主義や軍国主義と結びつけやすい。しかし、文化人であっても、政治的言動は、一定程度は政治外交史や政治思想史の文脈で理解する必要がある。また、文化人の政治的思惑や打算的行動を「悪」だと決めつける必要もあるまい。もちろん、文化人の文化的活動と政治的活動を完全に切り離すことはできないが、少なくとも政治的活動に関して芸術面中心の評価に偏るべきではない。一方、文化人の国策協力や政治的活動から生じる責任を免罪すべきではない。「芸術至上主義」によって「作品そのものはすばらしい」などとして文化人の責任を曖昧にしないためにも、政治外交史の文脈は重要である。

本論で扱った藤村の南米旅行に関していえば、国家主義に偏向していた日本の国策に従った藤村は国家主義的だというような単純な図式は成り立たない。文芸批評もしくは作家藤村個人ではなく、その外交活動の評価をするためには、対外政策や外交思想の議論を取り入れなければならないまい。

現代の戦争は総力戦である。軍事に直接関係しない文化人も戦争協力で動員される。1930年代からアジア太平洋戦争の時代、日本でも多くの文化人・学者が国策や戦争に協力した。この事実をどう評価するかは微妙な問題であり続けており、評価軸・方法とも明確になっているわけではない。政治と文化の関係を明らかにすることは、戦時期に限らない問題であり、芸術論・文化論の観点と政治論・政策論の観点を複合する一層の学際的研究の広がりが必要なのである。

## 注

- (1) 島崎藤村「巡禮」『藤村全集』第14巻、筑摩書房、1967年、124頁(以下、「巡禮」『全集』14、124頁の如く略す)。なお本稿では、旧字体は原則として新字体に直した。
- (2) 『日本ペンクラブ三十年史』日本ペンクラブ、1967年、98-99頁。ちなみに、「ペン」は、poets, playwrights のP, editors, essayists のE、novelists のNをとって、ペンとかけた名称である。
- (3) 『南米移民見聞録』1937年、移民問題研究会(以下、『見聞録』と略す)。現在は「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/>)に収録されている。なお、本書を紹介した論考として、関井光男「島崎藤村の講演『南米移民見聞録』」『国文学 解釈と教材の研究』32-13、1987年11月、162-165頁がある。
- (4) 目野由希「南米の島崎藤村 ―国策的国際文化交流の再考―」『文学研究論集』26(筑波大学)2008年、160-146頁、同「戦前期日本ペン倶楽部設立をめぐる国際情勢」『文化政策研究』第4号、2010年、105-116頁。稲賀繁美「プエノス・アイレスの雪舟 ―島崎藤村の国際ペン・クラブ参加―」同『絵画の臨界』名古屋大学出版会、2014年、424-439頁。
- (5) 前掲、目野「戦前期日本ペン倶楽部設立をめぐる国際情勢」参照。
- (6) この点に関しては、酒井一臣『近代日本外交とアジア太平洋秩序』昭和堂、2009年を参照。
- (7) 以下、近代日本の移民問題の全体像については、岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版社、2002



- 年、米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動 ―在外日本人・移民の近現代史』人文書院、2007年を参考にした。
- (8) 坂口満宏「日本におけるブラジル国策移民事業の特質 ―熊本県と北海道を事例に―」『史林』第97巻第1号、2014年、133-170頁。
- (9) 1930年代前半の日本外交の評価に関しては、井上寿一『戦前日本の「グローバリズム」一九三〇年代の教訓』新潮社、2011年を参照。
- (10) 以下、南米、特にブラジルに関する日本移民については、今野敏彦・藤崎康夫『移民史』I 南米編、新泉社、1984年、前掲、坂口「日本におけるブラジル国策移民事業の特質」。また、国立国会図書館作成の「ブラジル移民の100年」(<http://www.ndl.go.jp/brasil/index.html>)も有益である。
- (11) 澤田壽夫編『澤田節蔵回想録 ―外交官の生涯―』有斐閣、1985年、182-217頁。
- (12) 同上、185頁。
- (13) 「第十四回国際ペン大会報告」『全集』13、369-414頁。この報告中に南米での詳細な日程が記されている。
- (14) 前掲、稲賀「ブエノス・アイレスの雪舟」。引用は、434-435頁。
- (15) 前掲、目野「南米の島崎藤村」。引用は、116頁。
- (16) 「島崎・有島両氏を迎ふるに際して」『亜尔然丁時報』1936年9月5日(国立国会図書館所蔵)、2頁。
- (17) 「遙々訪づれた“平和の使節”」同上、10頁。
- (18) 『亜尔然丁時報』1936年9月12日、19日
- (19) 「巡禮」、『亜尔然丁時報』9月19日掲載の記事では9月13日に訪問。注13の日程では9月12日に訪問となっているのは藤村の誤記と思われる。
- (20) キプリングとイギリス帝国の関係については、北原靖明『インドから見た大英帝国―キプリングを手がかりに』昭和堂、2004年を参照。
- (21) 管見の限り、「移民研究会」の構成員は不明である。同会刊行の雑誌『海外移住』の1935年から36年の記事・論説には南米関係のものが多く、著者は外務省関係者が多数を占めている。こうしたことから、同会の性質は外務省にきわめて近いものと推察できる。
- (22) 『見聞録』1-2頁。
- (23) 前掲、稲賀「ブエノス・アイレスの雪舟」434頁。
- (24) 原勝郎については、原勝郎(渡部昇一監訳、中山理訳)『原勝郎博士の「日本通史」』祥伝社、2014年、酒井一臣「「文明国標準」の南洋観 大正時代における一教授の認識」『立命館言語文化研究』第21巻4号、67-76頁。原勝郎『日本中世史』平凡社東洋文庫、1969年、同『東山時代に於ける一縉紳の生活』講談社学術文庫、1978年も参照。
- (25) 「回顧(父を追想して書いた国学上の私見)」『全集』13、461-471頁(1941年1月脱稿、生前未発表)。引用は、466-467、469-470頁。
- (26) 日本ペン倶楽部については、前掲、『日本ペンクラブ30年史』、前掲、目野「戦前期日本ペン倶楽部設立をめぐる国際情勢」を参照。
- (27) 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開』有信堂、1999年。
- (28) 「国民外交」については、同上書の第2章にくわえ、酒井一臣「外交の民主化と国際協調主義 「国民外交」論を中心に」『史林』第94巻第1号、106-124頁、同「洪沢栄一の「国民外交」 渡米実業団を中心に」『洪沢研究』26、13-28頁も参照。
- (29) 「南米その他の地より帰て」『全集』13、428頁(初出は『東京朝日新聞』1937年5月2日から8日)。同様の文章が、「第十四回国際ペン大会報告」『全集』13、408頁にもある。
- (30) 前掲、目野「南米の島崎藤村」、155頁。

本論は、2013年度京都橘大学学術研究奨励費「戦間期の外交の民主化と日本の国際協調主義」及び、科学研究費補助金(基盤A)「環太平洋における在外日本人の移動と生業」(代表：米山裕)の研究成果の一部である。